

アリスティア・マクラウドの短編小説に関する一考察(1): 孫の「帰郷」を中心に

荒木陽子

はじめに

筆者は敬和学園大学『人文社会科学研究所年報』(第9号～第11号)において、ノヴァ・スコシア州ハリファックス出身の作家、バッジ・ウィルソン(Budge Wilson, 1927-)の作品を紹介した。⁽¹⁾ 彼女はトロント大学大学院で教育を受けるため、そしてピーターバラにあるトレント大学で長年教授した夫や家族に帯同するため、英語系のカナダの政治・経済・文化の中心であるオンタリオ州に転居を迫られた。しかし、彼女は一年のうち一定期間を故郷で過ごし、退職後には再定住して故郷を描きつづけることにより、長く沿海諸州(the Maritimes, 形容詞はMaritime、本論文中は形容詞に関してはカタカナでマリタイムとも表記)の外に身を置きながらも、自らのマリタイム人アイデンティティを主張しつづける。本稿はウィルソンと同郷で、長年創作およびイギリス文学を教授したオンタリオ州ウィンザーで2014年4月に「客死」し、遺体となって帰郷したアリスティア・マクラウド(Alistair MacLeod, 1936-2014)の作品に焦点をあてようとしている。マクラウドは大恐慌の時代に職を求めて両親が向かったサスカチュワン州で生まれ、10歳までを同州とアルバータ州で過ごした。さらにアメリカ合衆国で博士号を取得した後は異郷でキャリアをつみながらも、ノヴァ・スコシア州ケープ・ブレトンを故郷とみなし、19世紀に曾祖父がダンヴィーガン(Dunvegan)に建てた家で夏季を過ごし創作を続けた。⁽²⁾ ノヴァ・スコシア半島の北に位置するケープ・ブレトン島は、現在に至るまでゲール語の標識が残るなど、ケルト系、特にスコットランド系の移民が持ち込んだ文化が強く残る地域であり、マクラウドもその名前が示すようにスコットランド系である。

このようにカナダ沿海諸州出身の作家が、経済的・文化的理由から地理的には故郷を離れながらも故郷を描き続ける傾向は、現代に始まったものではない。それは1867年のカナダ連邦結成後、19世紀後半に起こったカナダ文芸ナショナリズムの時代に活躍した作家たち、すなわちチャールズ・G・D・ロバーツ(Charles G. D. Roberts, 1860-1943)やブリス・カーマン(Bliss Carman, 1861-1929)、さらにはルーシー・モード・モンゴメリ(Lucy Maud Montgomery, 1874-1945)にも既に見出だされる傾向である。特に、H.W. ロングフェロー(Henry Wadsworth Longfellow, 1807-82)の『エヴァンジェリン』

(*Evangeline* 1847)やモンゴメリの『赤毛のアン』シリーズ (*Anne of Green Gables Series* 1908-39) など、19世紀以降に出版されたこの地域を舞台とした文学作品は、農林水産業および鉱業という第一次産業に依存し、住民がその土地と密着して生活する、現代を席卷するグローバリゼーションとは程遠い、田園的、前近代的な地域のイメージを構築する手助けをした。しかしこうしたイメージに反して、現実の沿海諸州はオンタリオ州に首都をおいたカナダ連邦内における周縁化、近代化の遅れ、さらには地場産業の衰退のため、19世紀後半以降現在に至るまで大量の移住者を輩出し続けている。19世紀にはボストンを中心とするアメリカ東海岸の都市に、そして近年ではマクラウドの「夏の終わり」(“The Closing Down of Summer” 1976)や『彼方なる歌に耳を澄ませよ』(*No Great Mischief* 1999)が描く通り、長年地域の主要産業であった炭鉱業で培われた技術をもとに、世界各地の多国籍企業による資源掘削に労働者を供給しているこの地域は、早くからグローバリゼーションと無縁ではない。⁽³⁾ このことについては、近年の代表的な現代カナダ東海岸文学研究書、『ティム・ホートンズのアン』(*Anne of Tim Hortons* 2011)の著者でもあるハーブ・ワイル (Herb Wyile) も、日本カナダ文学会第32回年次研究大会 (2014年6月)における特別講演「カナダ東海岸文学におけるグローバリゼーションとモビリティ」(“Globalization and Mobility in Atlantic-Canadian Literature”) で言及していたとおりであるが、人と土地が密着した前近代的ライフスタイルが文学作品を通してロマン化され、観光産業の目玉となっているこの地域が、様々な理由でそのライフスタイルには留まることができなかった人々を外に排出することで、早くから近代性の表出でもあるグローバリゼーションを実践してきたことは興味深い。⁽⁴⁾

前段落でも少しふれたが、マクラウドの文学には故郷を離れ異郷からそれを回想する「マリタイム・ディアスポラ」や、沿海諸州と経済・文化的に共有点も少なくないニューファンドランド・アンド・ラブラドル州出身者までを含む「アトランティック・カナディアン・ディアスポラ」とその子孫がしばしば登場する。本稿では特にオンタリオ州とケベック州の都市に居住する、またはしていた孫が、ケープ・ブレトン島やニューファンドランド島に住む祖父母とともに時を過ごす、短編小説「帰郷」(“The Return” 1971)、「失われた血の塩の贈り物」(“The Lost Salt Gift of Blood” 1974)、「ランキンズ岬への道」(“The Road to Rankin’s Point” 1976)を取り上げ、⁽⁵⁾これらの作品の中でマクラウドがカナダ東海岸 (アトランティック・カナダ) を離れたことのない老人たちとその孫たちを、土地や風景との関係の中で、また老人たちを少なくとも一度はその土地を離れた子孫との対比のなかで、どのように表象するのかを考察しながら、マクラウド文学の一端を紹介する。その過程で、マクラウドが祖父母と親の世代の間で対立する価値観を描く一方で、ひとつ世代をおいた孫に「故郷」の旧来の価値観やライフスタイルがなんらかのかた

ちで継承される可能性を模索していること、そして彼がその可能性について感じているであろうアンビヴァレンスを明らかにしてゆきたい。

I. 「帰郷」

この地域の文学を研究するダニエル・フラー (Danielle Fuller) は、2008年の論文でカナダ東海岸以外に住む読者にとってエキゾチックなカナダ東海岸像を構築することが、マクラウドを含む20-21世紀転換期のアトランティック・カナダ文学の商業的成功の鍵であったと分析している。これに対して、沿海諸州のイメージを文学作品中で脱ロマン化することによりR.M.ヴォーン (R.M. Vauhan) に「反アリストテア・マクラウド」と呼ばれた、同郷の若い世代の作家リン・コーディ (Lynn Coady, 1970-) は、マクラウドの文学が人と土地のつながりを過剰に強調し、ロマン化している点を批判している。⁽⁶⁾ マクラウドが描くカナダ東海岸出身者は、しばしば出稼ぎ労働者や都市生活者の姿をとりながらも、カール・E・ジャーゲンズ (Carl E. Jirgens) が『彼方なる歌に耳を澄ませよ』の分析において指摘する通り、地理的には断絶した故郷とのつながりを祖先が旧世界から持ち込んだ伝統文化、伝説、そして言語の継承という形で維持しようとする。⁽⁷⁾ そして、時に彼らは文化を通して故郷とつながるに終わらず、物理的に故郷を訪れる。

「帰郷」の語り手である10歳のモントリオール、アレックス (Alex) も両親と父方の祖父母の住むケープ・ブレトン島の炭鉱町を訪れる。作品の時代設定は、家族の乗る列車がノヴァ・スコシア半島とケープ・ブレトン島の間にあるカンソー海峡をフェリーに乗せられて渡ることから、少なくともカンソー海峡横断道路 (Canso Causeway, 1955-) の開通以前であることがわかる。この旅で初めての父方の祖父母に会うアレックスの部外者の目は、約二週間の滞在期間中モントリオールとは異なるケープ・ブレトンの風景、ライフスタイル、そして故郷を去った父とそこに残る祖父母の断絶を現在形で描出していく。「ずいぶん久しぶり」に故郷を訪れるというアレックスの45歳の父は母方の祖父ギルバートの弁護士事務所に勤めている。⁽⁸⁾ 二つの世界を熟知する彼は息子そして両親に対してことあるごとに、「でも、モントリオールはこことは違うんだ」、「ただ、とにかく、同じ一族という仕組みのなかでは、もう生きられなくなっているんだよ」、⁽⁹⁾ 「この人たちはギルバートおじいちゃんとはまったく違うし、お母さんにはわからないこともあるんだよ」と、その違いや時代の変化を主張するが、こうしたやり取りを伝え物語ることにより、アレックスは父と祖父母の間ある大きな断絶を浮き彫りにしていく。⁽¹⁰⁾

初めて訪れるケープ・ブレトンは、アレックスにとっても異質なものである。それは物語の前半では「きれいな通りやきらきら輝くあかり」のあるモントリオール、後半ではいつも遊んでいるのであろうメカーノ社の模型と対比され、白いカモメ、緑の丘、青い海、

そしてなによりもそのむこうで「ぱっくりと口をあけた傷跡のような炭坑の黒い割れ目」やそこから飛び出す石炭を積んだトロッコが支配する「黒くて、すすけた町」として他者化される。⁽¹¹⁾ ここでは町やその住人がその土地から産出された石炭によって色づけされており、祖父母の家は黒っぽく、その家で彼を迎える祖母の服も黒、そして仕事を終えた坑夫は76歳になった祖父も含めて「みんな真っ黒け」である。⁽¹²⁾

しかし、マクラウドはアレックスが初めて見るケープ・ブレトンを、完全なる他者としては描いてはいない。先にマクラウド文学では地理的に故郷を離れた登場人物が、音楽や言語を通して故郷とのつながりを保とうとする点に言及したが、アレックスもケープ・ブレトンへの列車の中で、「何を言っているのかわからない」がゲール語を認識し、⁽¹³⁾ モントリオールの家で母が毛嫌する父のバイオリンのレコードのことを「思い出す」ことができる程度のケープ・ブレトン文化に対するリテラシーを身に着けている。⁽¹⁴⁾ このことは実際に訪問したことはなくても、アレックスが父や大学時代に彼の家に居候していた叔父を介して、未だ見ざる「故郷」の情報を埋め込まれていたことを示す。さらに祖先によってケープ・ブレトンに持ち込まれたケルト民謡は、朝食時に祖母の台所でラジオ放送され、地理的に遠く離れた二つの家をつないでみせる。そして父が聴きながら涙するこのバイオリンのレコードの存在は、地理的に故郷を離れ、二つの世界の違いを強く認識した上で、故郷に戻ることを避け、外見的にも精神的にもモントリオールの中産階級社会に同化しようするアレックスの父の故郷に対するアンビヴァレンスを表す。それはモントリオール出身の妻にとっては「不潔な習慣」でしかない、⁽¹⁵⁾ 炭坑労働者の習慣である嘔みたばこをやめる辛さを語る「どんなにたいへんだったか、おまえがあのとつらさを体験することはないだろうな」という、作品後半に現れる彼の発言にも強くあらわれる。⁽¹⁶⁾

ここで筆者はアレックスのケープ・ブレトンの風景に関する評価が、到着翌日両親から離れ、いどこ、地域の男性、そして祖父と直接交流することによって、「ものすごくきれいな眺めだ」と劇的に変化する点に注目したい。⁽¹⁷⁾ 同日夕方のアレックスと仕事を終えた祖父の入浴は、この変化をもたらすにあたり通過儀礼として特別な意味を与えられている。アレックスが、父親と祖父を迎えに炭坑に行くと、ちょうど坑内から出てきた「口ひげまで黒い」祖父は、ヘッドランプ、「かつこいい」バッテリーつき幅広ベルト、金属製の鑑識番号姿という非常に男性的な姿で、彼を「腰に引き寄せ、そのまま長いこと押さえ」る。⁽¹⁸⁾ そのため、アレックスは「黒さのなかに、沈められ、息ができなくなって溺れそうになる」。⁽¹⁹⁾ こうして朝出かけるときはこぎれいなシャツ姿で出かけたアレックスも、体が汚れてしまい、仕事を終えた炭坑労働者たちと一緒にシャワーを浴びることを余儀なくされる。石炭で黒くなった祖父の姿は、言うまでもなく白いシャツ、ダークスーツ、金時計、銀のキセル姿のモントリオールの母方の祖父、そして「スーツを濡らさない

ように新聞紙を敷いたベンチにぼつんと坐っている」アレックスの父とも対比されていることは言うまでもない。⁽²⁰⁾ アレックスは父の孤独を強調するかのように、2段落後にもう一度ひとりで座っている父の姿を描く。また、自らの父の腰に孫の頭を押し付けるといふ、どこか性的な含みを感じさせる動作を、「ちょっと、何やってるの？子供を離して！窒息してしまうじゃないか」と、止めようとするアレックスの父の姿は、⁽²¹⁾ 同じ日に孫たちに発情する雄牛を見せた農夫を「ジョン、あんた、恥ずかしいと思いなさい、こんな子供たちの前で」と、牽制する妻の姿と重なる。⁽²²⁾ このパラレリズムは彼が祖父に前夜に結婚生活10年間で子どもが一人である点を指摘されるシーンと合わせて、モンリオールにおける中産階級の生活が、炭鉱労働者としての経験もあるアレックスの父親を女性化させたとも言いたげである。

三人の関係が、彼らの服装とともに共に、浴場に向かう祖父とアレックス、そしてひとり取り残された父という位置関係のなかで前景化される一方で、炭坑の負の文化経験を持たないアレックスによって、批判的な視点を伴うことなく、それまでケープ・ブレトンの彼の一族で七代続いてきたという文化が、世代を超えて理想化され継承されていく。それは先に指摘した性的なイメージを喚起する二人の肉体的接触に加えて、実際に祖父に押しえつけられることにより、ケープ・ブレトンの土壌から生まれた「石炭の粉」がアレックスの身体に付着すること、そしてそれを祖父や伯父を含む同族男性集団と共に同地の土壌から生まれた水で洗い流すという行為に象徴的に示される。⁽²³⁾

モンリオールに帰った10歳のアレックスが、その後ケープ・ブレトンの文化を保ち続けたのかどうかに関する情報は与えられない。しかし、もう会えないであろう孫との別れを惜しむ祖母からもらった「しわだらけのドドル札」を「ぜったいに使わない」と断言し、⁽²⁴⁾ 祖父の手によって顔に塗られた石炭の粉を「お母さんの白粉に似ている」と表現できるアレックスのなかでは、モンリオールとケープ・ブレトンの二つの世界はもはや二項対立的な二つの異なる世界ではない。⁽²⁵⁾ 10歳の少年アレックスを通したケープ・ブレトン文化のロマン化に対する評価は読者によって分かれるであろうが、ここにマクラウドは異郷で故郷の文化が継承される可能性を示唆している。

II. 「失われた血の塩の贈り物」

「帰郷」はモンリオール育ちのマリタイム・ディアスポラ二世の少年を語り手として、彼と祖父母の関係、そして彼の親と祖父母の関係をケープ・ブレトンの風景の認識の変化を含む土地との関わりのなかで浮き彫りにしたが、「失われた血の塩の贈り物」における孫と祖父母の姿は、子どもを自分とは血縁関係のないニューファンドランド島の祖父のもとにゆだねた父親によって描かれる。語り手が父親であることは、主人公のジョン

少年には伝えられない。しかし、物語の終盤の別れの前夜、語り手の物思いのなかで、それまで明らかにされなかった彼の背景——彼がジョンの生物学上の父親であり、大学院生時代にニューファンドランドで伝説を収集していた際ジョンの母親と出会い、その研究の結果現在の職業についていること、そして現在は北米大陸中部の都市に住んでいること——が明らかにされる。

五年生のジョンの背景は同じ年頃のアレックスとは大きく異なる。ジョンは祖父母と暮らしていたが、母親が同郷の外装業者の男性と結婚し暮らしていたトロントに、語りの現在より二年前に一度転居する。しかし、ジョンは祖父曰く「ここに長く暮らして、向こうへ行くのが遅すぎた」ために、トロント生活になじむことができず祖父母のもとに送り返される。⁽²⁶⁾ さらにそれに前後して母親とその夫は交通事故で死去したため、ジョンには他に行き場がない。シーラ・ロジャーズ (Shelagh Rogers) がマクラウドとのインタビューで指摘している通り、しばしば漁業、林業、資源掘削業など厳しい自然環境と危険な労働環境のなかで生業を営むものを描くマクラウドの文学において、両親を失った子どもたちが祖父母の手によって育てられることは少なくないが、交通事故で母親とその夫を亡くすジョンのケースはその都市版とも考えられよう。⁽²⁷⁾ 祖父が娘の元パートナーであるジョンの父親に二人の死亡記事を見せながら話すこと、そして父親はジョンを自分と一緒に都会に連れて行きたいという思いを秘めていることは、彼のニューファンドランド訪問が、ジョンの帰郷と元パートナーの死の知らせを受けた結果の訪問であることを示唆する。

この物語でマクラウドは、カモメや霧といった可動の装置を用いて地理的・心理的に離れたトロントに住む三人と故郷をつなぐ。「でも、あっちにもカモメはいたけどね、トロントの港の上を飛んでた。みんなで二回、日曜日に見に行ったことがあるよ」というジョンの発言からわかるように、カモメはジョンと仲間が放課後遊ぶニューファンドランド島の漁村の上空でも、オンタリオ湖上でも飛んでいる。⁽²⁸⁾ そしてニューファンドランド名物の霧はニューファンドランドにおいてジョンの乗った飛行機の到着を困難にするとともに、トロントで二人の交通事故死を誘発することで二つの世界をつなぐのみならず、雪より「もっと重く、もっと濃い」⁽²⁹⁾ 「想像力の霧」⁽³⁰⁾ としても作品に複数回登場し、語り手を苦しめる重要な装置である。彼が想像力の霧に苦しめられた後、霧が大西洋に浮かぶ島であるニューファンドランド島とオンタリオ湖の湖畔にあるトロントが共有する水の変形であることに言及することは興味深い。

このように可動の装置が悲壮なイメージを伴いながら大きな断絶を抱えた二つの世界を結ぶ点は興味深い。カモメ、霧、そして不運に遭遇する子や孫が移動するのは対照的に、祖父母は彼らが住むニューファンドランドの「一枚岩にしっかりと打ちこまれている」家のようにニューファンドランドを離れない。⁽³¹⁾ 彼らは物語に頻出するイメージでも

ある岩と一体化しているのである。ジョンは隣人や知り合いとともにトロント間を往復移動しており、彼の祖父母も母親も一緒に移動していない。それぞれが現在の居住地を離れようとしなないことは、彼らの断絶の深さを浮き彫りにする。

祖父が、娘たちは「みんな結婚してモンリオールやトロントやアメリカに行ってしまった」、「だから、わしらにはあの子しかおらんのだ」と語ることから、「帰郷」同様この短編小説でも中間世代の親と祖父母が断絶するのに対して、祖父母と孫が固く結ばれていることがわかる。⁽³²⁾ そしてケープ・ブレトンから産出された石炭が祖父経由でアレックスをケープ・ブレトンに結び付けたように、この物語ではニューファンドランドの土地の大半を覆う岩、そこから湧き出る水、そしてそこで育つ水産物、さらにこれらすべてと強く結ばれている祖父母を介して、ジョンはその土地と結ばれている。

アパラチア山脈の延長であるロングレンジ山脈が島を貫くニューファンドランド島は、古い岩盤の上に成り立っているが、作品の中ではこの岩、そしてそれが細分化された石ころの表象が繰り返される。その形状が子宮にたとえられる彼らの生計の中心であり子どもの遊び場である港は岩場であり、ジョンの祖父の家は「岩にへばりつくように建っている」と表現される。⁽³³⁾ 門から家へと続く小道も両側に白く塗った石が並ぶ「石の小道」である。さらにジョンの趣味の一つが、おそらく小道の石同様、ニューファンドランドの岩盤のかけらであろう、石ころ集めとされることは象徴的だ。⁽³⁴⁾ トロントの母と養父を「誰も七時前には起きないんだ。僕が自分でお茶をいれて、待ってた。ひとりぼっちで」と批判的に比較し、祖父に漁師としての素質を認められるジョンは、早朝に起きだし浜辺で石を拾い、それを祖父に見せた後、帰る準備をしていた父に土産としてプレゼントするが、こうした発言や行為からもジョンが幼いながらも既にニューファンドランドの漁村を故郷とみなしていることがわかる。⁽³⁵⁾

ニューファンドランドの土地とジョンと祖父、そして出身地不詳で11年前のフィールドワーク以来、初めてその土地を訪れ、再び去ろうとしているジョンの父親をこの石が結ぶ。ここでジョンの祖父とは直接血縁関係にないジョンの父親が、血縁的にはジョンを介し、象徴的には石を介して、ニューファンドランドに結ばれる。しかし、「帰郷」でモンリオールとケープ・ブレトンを結んでいた音楽は、この物語ではジョンと祖父母のつながりを強調する一方で、ジョンの父親と他の三人の間に存在する断絶を顕在化する。食後、祖父の弾くアコーディオンに合わせて、ハーモニカ担当のジョンと祖母は喪失をテーマにした民謡を歌う。最後には三人で合唱になるのであるが、よそ者であろう語り手はそれに加わらない。代わりに彼はそれを「肩に重いものがのしかかっている気分だ」と表現し聞きいるにとどまる。⁽³⁶⁾

マクラウドはジョン少年にトロントという異郷を体験させ、ニューファンドランドに連

れ戻し、それが自分の故郷であることを認識させることで、祖父母の文化がその土地で孫に比較的直線的に継承される可能性を提示している。しかし、望郷を経験したものの、ニューファンドランドで自ら生計をたてる厳しさを体験していないジョンの目を通したニューファンドランド再発見を描くことを通して、マクラウドはトロントで事故死した二人が敢えて選ばなかったカナダ東海岸の漁村生活をロマン化しているという批判はここでも可能である。ただ、視点を変えれば、「帰郷」も含めて、マクラウドはあえて未経験な子どもの目を通してカナダ東海岸の伝統的な生活を理想化することで、彼らのヴィジョンや彼らを通した文化の継承の危うさを描いているとも考えられる点を我々はいかに捉えればよいのだろうか。

III. 「ランキンズ岬への道」

次に取り上げる「ランキンズ岬への道」は、孫がアトランティック・カナダに住む祖父母の世代をオンタリオ州から訪れる点、祖父母が土地と一体化して表象され、彼らが孫との間に入ることで孫を土地とつなぐ点、祖父母の世代と親世代が断絶を抱える一方で祖父母が孫に文化をつなぐことを希望している点、さらに音楽が家族をつないでいる点では、先に取り上げた二つの物語と共通する。語りの現在は1970年代初頭の7月のある一日であり、26歳の孫キャラムは自らが「不在の時期」と呼ぶ、⁽³⁷⁾「いつも異常に興奮している」南オンタリオにおける教職を辞しケープ・ブレトン島西海岸に住む両親の家に戻っている。⁽³⁸⁾そして、この日は15年間にわたり毎年親戚一同で実施している断崖絶壁で一人暮らしをつづける96歳の「おばあちゃんをどうするか」という使命を負った「遠征」に一番乗りで参加している。⁽³⁹⁾

キャラムによって語られる大都市で死んだ祖母の息子たち（不動産業者、食料品店チェーンの副社長、雑貨会社のバイヤー）の裕福さとは対照的に、「楽であること」を軽蔑し、電話も電気もない古い家屋で家畜と共に生活する彼女の生活ぶりは、二つの世代の断絶を象徴する。⁽⁴⁰⁾ これまでキャラムの両親のように麓の村や、さらに遠く離れて暮らす親世代は彼女を説得できず、「おばあちゃんを説得できる人間がいるとしたら、キャラムしかないな」と、彼にその任務を託している。⁽⁴¹⁾ 一方キャラムと祖母の親密さは、祖母が「ねえ、キャラム、一緒に住んでおくれ」、「おまえは前からここが好きだったろ。この土地も動物たちも申し分ないよ。みんなで十分生活できるよ。遺言書に、全部おまえに譲ると書いたからね」と、彼に全幅の信頼を寄せることからわかる。⁽⁴²⁾ 土地と祖父母の一体化の具合は、「失われた血の塩の贈り物」のジョンの祖父母の家と同様に、しっかりとした岩盤に建つ家によって示される。さらにこの地域の文学には、レイチェル・スティーヴズ (Rachel Steeves) が「血-地」(“blood-soil”)と表現する、ある血統と土地のつながり

を重視する考え方がしばしば見られるが、⁽⁴³⁾ここではそれが、70年前に祖父が自宅付近で転倒死した際雪に覆われた地面に広がったであろう「真っ赤な血」や、⁽⁴⁴⁾農場やあたりをうろつく「何世代にもわたる近親勾配」の結果である家畜に思いをめぐらす語り手の想像力を介してその土地の風景として表象される。⁽⁴⁵⁾

しかしその他の点でこの物語は他の二つの物語とは大きく異なる。第一に、まずこの物語は孫と祖母の話である。これまでに読んだ「帰郷」と「失われた血の塩の贈り物」は主として、家族の中でも祖父、父親、そして息子という「男性のつながり」を強調している。1970年代までのカナダ沿海諸州の作家の大半は男性作家であり、彼らは女性の存在を軽視し男性的視点にかたよったアトランティック・カナダ像を創出し一般化させた。この点に関しては既にデイヴィッド・クリールマン (David Creelman) が指摘しているが、マクラウドもまたその動きに加担した一人である。⁽⁴⁶⁾マクラウドの文学世界においては、特に血縁・地縁(しばしば血縁=地縁)をもった男性同士のつながりが重視されている。その背景には、先に言及した『彼方なる歌に耳を澄ませよ』や「夏の終わり」などのマクラウド作品に端的に描かれる通り、カナダ東海岸、特に頻繁にマクラウド作品の舞台となるケープ・ブレトンにおいては、かつて主としてその担い手が男性であり、チームワークを要する炭鉱業、漁業、林業などが主幹産業であったこと、またこうした職場ではしばしば、息が合い同じ言葉話す家族や同じ地域の出身者でチームが組織されていたことがある。さらにマクラウドによれば、かつてのケープ・ブレトンのケルト系コミュニティがそうであったことも影響して、こうした第一次産業が衰退したあとも、彼らは男性だけの仲間集団を懐かしむ傾向があるという。⁽⁴⁷⁾こうした男性仲間集団は、「帰郷」における男性だけで牛の種付けに興じるシーンなどにも見出すことができる。しかしキャラムはそのような男性同族集団と徒党を組むことはない。彼は彼らの仲間になる代わりに、祖母と共に彼らを待ち受ける側にまわり、「なにもしないで、午前中ずっとここにすわり」、一歩引いた立場を保つ。⁽⁴⁸⁾またこの物語では家族の男性の多く——祖父と三人のおじ——は既に死んでおり、作品中キャラムが彼らと直接触れ合う機会もない。ロッホアーバーの海岸に点在する祖先の家の土台も「ぼろぼろに崩れ」「点在している」。⁽⁴⁹⁾こうした断絶のイメージは、キャラムが祖母の家の周りのあちらこちらに見出す「によきつと男根のように立っている」煙突⁽⁵⁰⁾や「重そうな陰囊をぶら下げた」雄羊といった、男性的生殖のイメージと皮肉な対比をなす。⁽⁵¹⁾

この家族の男系血統の断絶イメージは、祖父と孫のつながり、そして彼らへの文化の継承を描いた他の二つの孫の「帰還物語」との最大の違いである。前述の祖父が土地に流した血のイメージも、結局は血統の保存にはつながらない。それは祖母の家の庭へとつづくゲートを開けようとするキャラムの鼻からふきだし、「靴を真っ赤に染める」血のイメー

ジと重なり、皮肉にも断絶のイメージへとつながってゆく。⁽⁵²⁾ 一見すると祖母との接触を通してキャラムにつながってゆくように思われたランキンズ岬のマクリモン家の文化は、キャラムが密かに死の病に侵されていること、また祖母がそれを知った直後に急死を遂げることにより決定的に断絶する。このようにキャラムの訪問の本当の目的は「遠征」に参加するのではなく、「死を迎えるための強さ」を見つけるため、⁽⁵³⁾「祖母がこれまで出遭ったとてつもなく多様な死を、どんなふうを考えているのか知りたい」からであり、⁽⁵⁴⁾少なくなっていく未来の代わりに過去にさかのぼることで、「今は少ないと思うものを増やせる」かもしれないからなのである。⁽⁵⁵⁾ ここで、キャラムの父を祖父の死後に生まれた一番若い息子とし、祖母は七番目の子どもである彼を妊娠中、独身で子を持たずに世を去ろうとしているキャラムと同じ26歳だったという設定は悲壮感を高めるよう仕組まれていると考えられよう。

そして、ほかの物語で祖父母との接触を通じて孫が故郷の土や岩という土地につながるイメージは、キャラムが祖母の垢の付いた爪を切る際に互いに手を握り締めるシーンとして二度にわたりこの物語にも現れる。ここではマクラウドは「垢」を表現する英単語として“grime”を使っているが、この英単語がしばしばこびりついた土を意味することは偶然ではないかもしれない。しかしこのイメージもまた積極的な方向性は持っていない。他の二つの作品では積極的なイメージを作り出していた祖父母との直接的接触や故郷の土地の表象は、真夜中「死期が近く、ほかのどこで死ぬべきかわからず」故郷に戻ったキャラムが、⁽⁵⁶⁾かつて子どもたちと馬を使ってちいさな橇で夫の遺体を運んだ家の前の坂道で死んでいる祖母を見つけ、その場でくずれ落ちようとする時に見た闇とともに、実際には物語に描かれていない彼らの墓穴のイメージを喚起するのである。「ランキンズ岬への道」ではこのように祖母は皮肉な形で孫と土地をつなぐ。マクラウドはここで、ほかの二つの物語よりも「経験」を得た孫を媒介として用いることで、たとえ孫が地理的に帰還しても祖父母の文化の孫への継承や二つの文化の融合が必ずしもうまくはいくとは限らないことを強く示唆している。

むすびにかえて

本稿はアリスティア・マクラウドの短編小説の中から、孫が祖父母を訪ねる短編小説を三作品を取り上げ、そこでマクラウドがカナダ東海岸を離れたことのない老人とその他の土地での経験を持つ子孫を、土地との関係の中でいかに表象するのかを検証した。検証はマクラウドは先祖代々の土地と旧来の生き方に固執する祖父母と、当世風の生き方を志向しその地を去った親の世代の間で対立する価値観を描く一方で、世代をおき、祖父母の世代とも親世代とも文化を共有する可能性を秘めた孫の存在に、旧来の文化が何らかの形で継

承される、ないしは両者の価値観が融合する可能性を模索している点を明らかにした。そして「帰郷」においては、異郷で静かに二つの価値観が融合され、伝統的文化が継承される可能性、「失われた血の塩の贈り物」では、異郷を経験して故郷に戻った孫が都会の価値観を否定し、より積極的に祖父の生業であった漁業を継いで土地に残る可能性を提示した。そして、祖父母の世代の文化が孫に継承される可能性の不確実性や非現実性は、命尽きつつある26歳の孫を語り手として配した「ランキンズ岬への道」において積極的に示される。彼は親世代、祖父母の世代両方の価値観・文化を理解するが、死する身であるためそのいずれをも継承しない。伝統的なライフスタイルや文化の継承が示唆されている先の二つの物語でも、マクラウドがいずれの場合も敢えてまだ10歳前後の若い少年を孫として用いることで、彼らの未来の不確実性や非現実性をも同時に示唆していることは、マクラウド自身がその継承に対して感じているであろうアンビヴァレンスを浮き彫りにする。マクラウドが文学作品を用いて次第に消えゆく文化に哀歌を捧げている可能性は既にコリン・ニコルソン (Colin Nicholson) やクリスチャン・リージェル (Christian Riegel) などの研究者が指摘してきたとおりである。⁽⁵⁷⁾

一様に孫たちの目を通して理想的に描かれるアトランティック・カナダの前時代的な牧歌的風景も、必ずしもポジティブな方向性を与えられているとは限らない。キャラムはその土地に帰還することを「子供の頃に泳いだ清らかな水」で泳ぐと、鮭の遡上の例を用いて理想化して見せるが、その鮭は病み、「自分の命を救えるものはないこと」を知っており、⁽⁵⁸⁾ 地理的にも先に何も無い祖母の住む岬を「ここが正真正銘の終わり」とみなす。⁽⁵⁹⁾ このようにマクラウド文学において、祖父母たちと孫とのつながり、ならびに彼らを介した孫と故郷の土地のつながりは、終わりをも表象しえる刃の表象である。そしてそれが終わりとつながる際には、孫の若さゆえにマクラウドの物語の中でしばしば奏でられる物悲しいケルト民謡と共に物語の哀歌としての側面を強化する。

しかし物語の本筋で伝統的な文化やライフスタイルの継承を否定した「ランキンズ岬への道」もまた、完全にその可能性を否定したわけではない。継承の鍵を握るのもまた、「失われた血の塩の贈り物」でも、キャラムの精神の中でも、断絶の表象としても機能した音楽である。祖母にはキャラム以外にも多くの子孫がいる。そのうち孫二人と曾孫一人は、祖母がランキンズ岬の静寂の中バイオリンで「私は二度と戻らない」(“Never More Shall I Return, or, MacCrimmon’s Lament”)を奏でるこの日に、トロントとラスベガスで「強烈」なリズムの1970年代の音楽を演奏している。⁽⁶⁰⁾ キャラムは文中これをマクリモンの文化の断絶の例として用いている。しかし、トーマス・ホッド (Thomas Hodd) がその論文で「遺産保存物語」(Heritage Preservation Narrative)と呼び、同じくケープ・ブレトン出身の作家シェルドン・カリー (Sheldon Currie, 1934) の短編小説「グラ

ス・ベイ・マイナーズ・ミュージアム”(“The Glace Bay Miner’s Museum” 1977) とともに分析したマクラウドの短編「完全なる調和」(“The Tuning of Perfection” 1984) において、メディア向けに伝統的なケルト民謡をアレンジした若者のグループに当初反感を持っていた老人は、彼らの音楽を聴き、彼らと接することで、物語の終わりにスタイルは異なるものの、彼らの精神のなかにケルトへのつながりを見出した。「ランキンズ岬への道」では、そのような場面は描かれていない。しかし、キャラムの伝統継承に関する否定的な発言の中にあえて逆説的に組み込むことにより、ランキンズ岬のマクリモンの音楽や文化、そしてそれによってあらわされる精神が、形を変えてつながっていく可能性を残すというマクラウドの屈折した姿勢は、彼がその存続の現実性を疑いながらも、ケルト系移民が持ち込んだカナダ東海岸の伝統的文化、ライフスタイルに対して抱き続けた強い愛着を読者に伝えるのである。⁽⁶¹⁾

註

- (1) 荒木陽子「『児童・ヤングアダルト文学者』が描く『高齢者』：バッジ・ウィルソンのクロスオーバー短編小説」『人文社会科学研究所年報』11 (2013): 191-204; 「バッジ・ウィルソン著 *Before Green Gables*: アニメーション『こんにちはアン～Before Green Gables』との相違点とその効果」『人文社会科学研究所年報』9 (2011): 135-48; 「バッジ・ウィルソンの世界：『戦争』と物語のパターン」『人文社会科学研究所年報』10 (2012): 145-58.
- (2) Shelagh Rogers, “An Interview with Alistair MacLeod,” in *Alistair MacLeod: Essays on His Works*, ed. Irene Guilford (Toronto: Guernica, 2001), 12.
- (3) Alistair MacLeod, “The Closing Down of Summer,” in *Island: The Collected Stories* (Toronto: McClelland & Stewart, 2000), 180-208; *No Great Mischief* (Toronto: McClelland & Stewart, 1999). 本稿では読みやすさを重視するため、マクラウドの作品名および引用等については、新潮社より出版された中野恵津子の翻訳を使用する。前掲の二つの作品の日本語訳はアリスティア・マクラウド「夏の終わり」『灰色の輝ける贈り物』(新潮社, 2002), 203-33; 『彼方なる歌に耳を澄ませよ』(新潮社, 2005)。引用箇所については原文を註に引用する。
また本稿が短編小説の引用に使用する原典は前掲の *Island* である。同書は『彼方なる歌に耳を澄ませよ』のベストセラー化を受けて、それまでにマクラウドが出版した短編小説集 *The Lost Salt Gift of Blood* (Toronto: McClelland & Stewart, 1976) と *As Birds Bring Forth the Sun* (Toronto: McClelland & Stewart, 1986) に収録されていた作品群に新作を加えて一冊の短編小説集として刊行されたものである。しかし、この作品の日本語訳は、このコレクションとも、元となった二冊の短編集とも異なるタイトルを持つ二冊の短編集として翻訳されている。
- (4) Herb Wyile, *Anne of Tim Hortons: Globalization and the Reshaping of Atlantic-Canadian Literature* (Waterloo: Wilfred Laurier UP, 2011); “Globalization and Mobility in Atlantic Canadian Literature” [Special Lecture given at the 32nd Annual Meeting of the Canadian Literary Society of Japan held at Chukyo University, Nagoya, Japan, 14 June, 2014].

- (5) カナダ沿海諸州とはニュー・ブランズウィック州、ノヴァ・スコシア州、プリンスエドワード島州を指す。一方でカナダ東海岸は、この東部三州にニューファンドランド・アンド・ラブラドル州を加えた地域を指す。
- また、本論文で主として取り扱う短編小説の文献情報は以下の通り。Alistair MacLeod, “The Lost Salt Gift of Blood,” in *Island*, 118-142; “The Return,” in *Island*, 79-142; “The Road to Rankin’s Point,” in *Island*, 143-79. 日本語訳については以下の文献を参照した。アリスティア・マクラウド「失われた血の塩の贈り物」『灰色』, 135-62; 「帰郷」『灰色』, 91-112; 「ランキンズ岬への道」『灰色』, 163-202。以下、本論文文末註ではこれらの短編ならびに書籍の中の記事やインタビューが複数回使用され、“ibid.”を使用せずにそれに言及する際には、原則的には文献情報から書名を省略する。
- (6) Danielle Fuller, “The Crest of the Wave: Reading the Success Story of Bestsellers,” *Studies in Canadian Literature* 33, no. 2 (2008): 40-59. コーディのマクラウド批判に関しては、次の文献を参照されたい。Lynn Coady, “‘Flawed Splendour’: A Conversation with Lynn Coady,” *Studies in Canadian Literature* 31, no. 1 (2007): 231-38; R.M. Vaughan, “To the Lighthouse. . . Or Maybe Not.” *The Weekend Post*, 18 March 2006, WP13.
- (7) Karl E. Jirgens, “Lighthouse, Ring and Fountain,” *MacLeod*, 94.
- (8) マクラウド, 「帰郷」, 98. 原文は “You have been a long time coming home,” “The Return,” 95.
- (9) Ibid., 98, 102. 原文は “it’s different in Montreal, you know”; “It is just that, well somehow we just can’t live in a clan system anymore,” *ibid.*, 85, 88.
- (10) Ibid., 106-107. 原文は “I know, but these people are not at all like Grandpa Gilbert and there are things that Mama doesn’t understand,” *ibid.*, 92.
- (11) Ibid., 103, 96, 原文は “the town, which is black and smoky and has no nice streets nor flashing lights like Montreal”; “the black gashes of coal mines which look like scabs,” *ibid.*, 89, 83.
- (12) Ibid., 107. 原文は “They are completely black,” *ibid.*, 92.
- (13) Ibid., 96. 原文は “although I do not understand it,” *ibid.*, 82.
- (14) Ibid., 93. 原文は “I am reminded of the violin records which he has at home in Montreal,” *ibid.*, 80.
- (15) Ibid., 106. 原文は “a filthy habit” *ibid.*, 92.
- (16) Ibid., 107. 原文は “Yes, it was, Alex,” “more difficult than you will ever know,” *ibid.*, 92.
- (17) Ibid., 110. 原文は “It is very beautiful,” *ibid.*, 95.
- (18) Ibid., 108. 原文は “he presses my face into his waist and holds me there for a long, long time,” *ibid.*, 93.
- (19) Ibid., 108. 原文は “drowning in blackness until I am unable to breathe,” *ibid.*, 94.
- (20) Ibid., 109. 原文は “him sitting all alone on the bench which he has covered with his newspaper so that his suit will not be soiled,” *ibid.*, 94.
- (21) Ibid., 109. 原文は “What are you doing? Let him go! He will suffocate,” *ibid.*, 94.
- (22) Ibid., 105. 原文は “John, you should be ashamed of yourself; in front of these children,” *ibid.*, 90-91.
- (23) Ibid., 108. 原文は “coal dust,” *ibid.*, 93.
- (24) Ibid., 112. 原文は “crinkled dollar that is never spent,” *ibid.*, 96.
- (25) Ibid., 108. 原文は “almost like my mother’s powder,” *ibid.*, 93.
- (26) マクラウド, 「失われた」, 153; 原文は “he was here too long before his going,” MacLeod, “The Lost,” 135.
- (27) Rogers, “An Interview,” 31.

- (28) マクラウド, 「失われた」, 147. 原文は “There were gulls there though, flying over Toronto harbor. We went to see them on two Sundays,” “The Lost,” 129.
- (29) Ibid., 149. 原文は “it is more heavy and more dense,” ibid., 130.
- (30) Ibid., 137. 原文は “imagination’s mist,” ibid., 119.
- (31) Ibid., 137. 原文は “firmly permanent in the grey unsundered rock,” ibid., 119.
- (32) Ibid., 155. 原文は “All our other daughters married and far away in Montreal, Toronto, or the States,” “[s]o we be hav’ n only him,” ibid., 136.
- (33) Ibid., 144. 原文は “cling to the rocks,” ibid., 126.
- (34) Ibid., 159. 原文は “The path. . . has had its stone worn smooth by the passing of countless feet,” ibid., 126.
- (35) Ibid., 147. 原文は “When I was in Toronto,” says John, “no one was ever up before seven. I would make my own tea and wait. It was wonderful sad,” ibid., 129.
- (36) Ibid., 150. 原文は “the mood seeming to hang heavily upon our shoulders,” ibid., 131.
- (37) マクラウド, 「ランキンズ」, 186. 原文は “my ‘absent’ years,” “Rankin’s,” 165.
- (38) Ibid., 186. 原文は “always seemed so overheated,” ibid., 165.
- (39) Ibid., 187. 原文は “an expedition which might best be entitled ‘What to do about Grandma?,’” ibid., 165-66.
- (40) Ibid., 193. 原文は “the ‘ease’,” ibid., 172.
- (41) Ibid., 189. 原文は “If anyone can convince her, it will be Calum,” ibid., 168.
- (42) Ibid., 186. 原文は “Oh stay with me, Calum. . . . You have always liked it here, and the land and the animals are as good as ever. You can make a good life here for all of us. I have left you everything in my will,” ibid., 164.
- (43) Coady, “Flawed Splendour,” 233-4. “blood-soil” という言葉はインタビュアーのステイヴズによって使われている。
- (44) マクラウド, 「ランキンズ」, 169. 原文は “brightest scarlet staining the moon-white snow,” “Rankin’s,” 148.
- (45) Ibid., 174. 原文は “animals are descended from livestock that has been here for a long, long time,” ibid., 153.
- (46) David Creelman, *Setting in the East: Maritime Realist Fiction* (Montreal and Kingston: McGill-Queen’s UP, 2003), 173-76.
- (47) Rogers, “An Interview,” 19.
- (48) マクラウド, 「ランキンズ」, 189. 原文は “has done nothing but sit here all morning,” “Rankin’s,” 168.
- (49) Ibid., 179. 原文は “the crumbled foundations that now dot and haunt Lochaber’s shores,” ibid., 153.
- (50) Ibid., 172. 原文は “a stone flue stands with phallic reality,” ibid., 151.
- (51) Ibid., 173. 原文は “swinging scrota almost dragging on the ground,” ibid., 152.
- (52) Ibid., 173. 原文は “splashing scarletly upon my shoes,” ibid., 152.
- (53) Ibid., 194. 原文は “strength for. . . the meeting of my death,” ibid., 172.
- (54) Ibid., 181. 原文は “I would like to realize and understand now my grandmother’s perception of death in all its vast diversity,” ibid., 160.
- (55) Ibid., 198. 原文は “I might have more of what now seems so little,” ibid., 176.
- (56) Ibid., 194. 原文 “I know I am to die and do not know where else to do it,” ibid., 173.
- (57) Colin Nicholson, “Signature of Time: Alistair MacLeod and His Short Stories,” *Canadian Literature* 107 (1985): 99; Christian Riegel, “Elegy and Mourning in Alistair

MacLeod's "The Boat," *Studies in Short Fiction* 35 (1998): 233.

- (58) マクラウド, 「ランキンズ」, 186. 原文は "to swim for a brief time in the clear waters of my earlier stream. The returning salmon knows of no 'cure' for the termination of his life," "Rankin's," 165.
- (59) Ibid., 167. 原文は "It is an end in every way," "ibid.," 146.
- (60) Ibid., 180. 原文は "insistent," "ibid.," 159.
- (61) Sheldon Currie, "The Glace Bay Miner's Museum," *The Glace Bay Miner's Museum* (Ste. Anne de Bellevue, PQ: Deluge, 1979), 7-22; Thomas Hodd, "Shoring against Our Ruin: Sheldon Currie, Alistair MacLeod, and the Heritage Preservation Narrative," *Studies in Canadian Literature* 33, no. 2: 192-209; Alistair MacLeod, "The Tuning of Perfection," *Island*, 271-309. なお、翻訳はアリスティア・マクラウド, 中野恵津子訳「完全なる調和」『冬の犬』(新潮社, 2004), 77-122を参照のこと。